

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ハイスクールD×D IF

【作者名】

tyta

【あらすじ】

4年前悪魔、天使、堕天使の中で人を殺したりするものが首を切られて殺される事件が多発していた。各勢力は犯人を探すも結局見つからずにその犯人は姿を消した。

そして現在とある公園から犯人の所持していた神器の反応が出現した。その現場に向かった悪魔のリアス・グレモリーは自分と同じ学校の制服を着る少年が堕天使と戦ってるのを目撃する。

プロローグ

4年前

とある屋敷のある部屋でひと組の男女がいた。女性のほうは銀髪のメイドで男のほうは赤髪の美男子であった。

「サーゼクス様、S級はぐれ悪魔が討伐されたようです」

「そうか、それで倒したのは誰だ？」

「それが、わからないんです」

「わからない？ どういうことだ」

「反応があつてすぐにその領主と眷属の者が向かったのですが、現場に着いた時にはすでに首を切られて消滅しかけていたそうです」

「現場までの時間は？」

「およそ5分です」

「5分でS級を倒すとは」

そう言つてサーゼクスと呼ばれた男は考える。そんなことができるのは上級悪魔でもかなり少ない。墮天使でも幹部ぐらいしかいないだろう。

そんなことを考えてる扉を壊さんばかりの勢いで誰かが入ってきた。

「失礼します!! サージェクス様、先ほどS級はぐれ悪魔が狩られた領地で更に3体のはぐれ悪魔が狩られました!!」

「!!」

「彼らをやった犯人は分かりませんが犯人は神器（セイクリッド・ギア）を所持していたそうです。」

「神器の持ち主か…そこまで強力な神器だと神滅具（ロンギヌス）かもしないな」

「どうしますか？」

「とりあえず犯人の目的が分からないから周辺地域の悪魔に警戒させよう」

そう言って彼らが部屋を出ようとするのと部屋の机の電話が鳴った。

「こちらサーゼクス・ルシファー、…それは本当か？ 分かった今すぐ魔王全てを緊急招集させる」

そう言って電話を置くと彼は言った。

「エクソシストのフリード・セルゼンという者が任務先で神器所持者に首をはねられて死亡したらしい」

「!!」

「彼は悪魔を退治に来て悪魔とその悪魔の依頼主を殺害したそうだ。そして任務完了の報告中に『一般人』に見られたから始末すると言って連絡を切り教会の派遣した者が現場に行った時には首をはねられ

ていたらしい」

「フリード・セルゼンと言えば近い内に協会から除名される予定の人物でしたね、なんでも関係のない一般人を殺害したりと神に仕えるにふさわしくない行為をしたとかで」

「そして墮天使側でも人間を殺してた墮天使数名が首を刎ねられ殺されてたようだ」

そう言ってサーゼクスは部屋を出て行く。

「今すぐ全悪魔に警戒態勢を取らせよう。それと他の勢力にも協力体制を申し込まなくてはだな」

その後の調査で分かったことは被害にあった悪魔やエクソシストや墮天使は全て人間に害をもたらしていたものであること、犯人は少年であること、神器は鋭い刃であるが剣などではないということ、そして事件の起こるのは夜だけでとある悪魔の領地から半径2km以内だということが分かったが一向に犯人は見つからなかった。

そして1年が過ぎたころにその事件は急に止まった。他の勢力も捜査を続けたが犯人は見つからなかった。

そして現在とある悪魔の領地で再びその神器の反応がでた。その現場に向かうのは赤い髪をした女性、そして彼女が現場に着いた時に見たのは墮天使と対峙する一人の少年だった。

出会い

兵藤一誠、それが俺の名前だ。特に目立った特徴もなく、休み時間には親友である松田と元浜と木場と一緒に他愛もない話をしたりゲームをしたりして普通に過ごしていた。

しかし今日俺は後輩の女の子に告白された!! 特に目立った特徴もない俺に彼女ができたのだ。それを聞いた俺の親友の3人は

「イッセー!! お前どんな裏技を使ったんだ!？」

「そうだぞイッセー!! 隠してないで俺たちにも教える!!」

「おめでとう、イッセーくんにも春が来たんだね」

と松田と元浜は俺が告白されたのが信じられなくらく俺に詰め寄ってきて、木場は俺のことを素直に喜んでくれた。

そして付き合ってから初めてのデートの日

???
side

今日でこの退屈な日常も終わる。何で私がこんななんの特徴もない奴なんかと付き合ってるぶりなんかしなきゃいけないのよ。

デートのコースにしたって普通すぎるし、やることなすことすべて普通の奴。此処まで特徴がないと逆にすごいと思えるわね。

でもそんな日常も今日でおしまい。私はこいつを殺して、計画を進めるとしましょう。

「イッセーくん、ちょっと見せたいところがあるんだけど一緒に行ってくれない?」

さて後はあの結界を張っておいた公園へこいつを連れてって殺すだけだ。

??? side out

リアス side

私はリアス・グレモリー、この一帯の領主としてやってきた悪魔である。

今日も私の活動拠点であるオカルト研究部へ来たらいつもは遅くまで来ないはずの私の下僕の二人の男性悪魔がやってきた。

「あら、今日は早いのね」

「今日はいつが居ないから教室に居る意味もないしな」

「くっ、デートなんてうらやましい！ もてる奴なんか全員死んでし

まえばいいのに」

「まあまあ、そんなこと言わないで喜んであげようよ」

そう言いつつソファアに座って三人は親友の事について話している

「それより良かったの？ 彼と付き合ってる彼女堕天使なんでしょ

」？

私がそう言つと眼鏡をかけてる方が反応する

「そうでしたね。解析したら堕天使だったから警戒してたけどなんにもおかしいところもないしこいつの能力で今も観察しているから万が一はないでしょ」

「そうですよ。今も手を組んで公園に入っていつ…結界が張られてる公園に入った」

その瞬間彼らは立ちあがった

「場所は!!」

「ここから南西に1kmの所です!!」

そう言って部屋を出ようとした時私の持ってた携帯が鳴り響いた。そしてこの音は

「第一級警戒対象出現!! 場所は…!! さっき一人が入っていった公園!!」

「!!」

「すぐに転位用の魔方陣を用意するから他の下僕も集めてきて!!」

「了解!!」

そう言って三人はすぐさま走り去る。さて、私も急いで用意をしなければ!!

リアスside out

イツセーside

俺の彼女である天野夕麻ちゃんがデートの最後に機体と言った場所は公園であった

「ねえ、イツセーくん」

「なんだい、夕麻ちゃん」

「私達の記念すべき初デートって事で、ひとつ、私のお願い聞いてくれる？」

「うん、俺に出来ることならね」

「死んでくれないかな」

…やっぱりこいつも人を殺しても何も思わない奴か

なら...

「別にいいよ」

俺が即答すると、彼女は眼を見開いた

「ただし」

そして俺は手を振り上げた

「その前に君が死ななかつたらね」

そう言って俺は手を振り降ろした

イツセー side out

夕麻 side

一体何が起ったのだろう。私はこの公園で彼を殺そうと思って連れてきて、彼が驚いている間に殺そうとしたのだけど彼は私の発言に即答でOKを出し驚いている私の前で手を挙げてから振り下ろした。とっさに左に体を投げ出すように飛ぶ
そして

「ぎゃあああああ!!」

次の瞬間私の右腕が切断されて血が溢れだす

「あれ？ 避けられちゃったか。今で真つ二つのする予定だったんだけどな」

彼がニコニコしながらそう言った

「ど...どっして...」

「ん？ それはどうして君に攻撃したのかってことかな、墮天使レイナレさん」

その瞬間私は凍りついた。何故私の名前がこいつに知られてる？

何故一般人のこいつが私達の存在を知っているの？

そう考えてる内に彼はまた手を振る。私は急いで翼を出現させ空へ逃げる

「さて、いろいろと騒ぎになる前に終わらせるか」

そう言って彼は構える。私も止血をし光の槍を出現させてそれを

構える。そしてお互いに動こうとした瞬間公園の端に魔方陣が出現した。それを見て彼が舌打ちしながら構えを変える右腕を前に突き出し何かを唱え始めたようだ。

そして、最悪なことに魔方陣から悪魔たちが6人出てきた

夕麻side out

リアスside

魔方陣の準備ができた。下僕も全員集まった

「皆、すぐ行くわよ」

そして魔方陣に全員が折ったことを確認した私達がすぐさま目的地の公園へと飛ぶと片腕の堕天使と私の学校の制服を着た男子生徒が向かい合い臨戦態勢を取っていた

「じぎげんよう、堕天使レイナーレ、及び第一級警戒対象認定者」

「……グレモリー一族の娘か……」

「はじめまして、私はリアス・グレモリー、グレモリー家の次期党首よ」

「今はあなたなんかにかまっている時間はない」

そう言ってる間も彼女は目の前の人物に集中していた

「彼がイツセーくん？」

私が後ろに居る者に質問をするが返事がない。後ろを向くと三人

が固まって驚いたような顔をしている

「…お前…本当にイッサーか？」

そつつぶやいたのは眼鏡をかけたほつであった

「お前は友達の顔も見分けられなくなったのか」

『仕方ないよ。今のイッサーは普通のイッサーをしてる奴からしたらおかしな位存在感があるもの』

「おい、それ普段の俺が存在感がないみたいじゃないか」

『相棒、お前の普段の存在感は普通以下だぞ』

「お前らが俺のことをどう思ってるかはよく分かった」

そんな光景を無視するかのように彼は右腕の鎌？ と左腕の籠手から聞こえてきた声と話をしだす

その様子を見て堕天使はその場から飛んで逃げようとするがその瞬間彼は右腕を振るう

「逃がすかよ」

その瞬間堕天使の羽が切断され地に落ちた

「とりあえず俺を狙ったんだ。死んでもらうぜ」

そつ言っって首を一閃した